只誠藏

日本紀異賜ふ天地ちづめ為
なりる時ひとつの物あり。形葦芽
乃如し見れ神と為る。國常立尊
と申す事。天神七代高天原の乃
記しる形くに道の根元を別ちり。
天神五代て陰陽みづから定
く。男女乃神いでて治ひ。なんぞ下
饗れもり尊流のなげ海田。梅花乃

郷庫
喜多村藏

汚されたる世風よ。ちるまで柳の緑
紅葉一の酒具。なのつて眼と汚しぬ。美
い美男人乃あれ。圓れる人。源氏の紀に
の教びのつぐびあるべ。無義茶んの間
朝鮮から。亀麦もなのつび。強く
若道のあ雑れ門に入事れて

貞享四年竜集丁卯陬月

男色大鑑　卷第一

第一　男道の風俗

一　色ハ恋の門乃掛ものゝ　二十目

月縁

祇代乃ゝ
日本小説れる紀女嬢ひのゝ
義乃根元紀ゝ侯のゝ

二　山道ふいろはにほへと　六十目

ゝ乃の手出ゝ
紀の義ゝ里乃お髪ゝ
情色一法師ハ紀方ゝれぬゝ

三

墻乃中ハ松楓柳等勝付　十丁目

ちひ入ハ紀伊国
庭中の名書ハ情よ霧る
横ハ角入どれえ服乃

四

玉章ハ鞠小通とて　十五丁目

大社ハ弟乃もとぶの作
三年乃西ひ清水人間乃
恨ハ花ふさ袖よ垂乃

五

墨絵よ法ゝ紀綴畫乃級　廿二丁目

ゝ乃燒ハ命とゝ所業の
女筆も手もとゝ
世びハ矢さ紀よ流ひ

月絵終

天照神代のちゝめ深橋の汚れよりとゝ尾ゝ
のおゝ色て部乃ふりゝ
まゝ乃弟ハ出さし弟の
蛙蛉國とゝいゝ素盞
たゝ乃れそれゝ世ふ女
鼻もあ乃姫入名招菅
ど義なゝてわゝびハ
とゝゝどされど弟乃れ
ゝ。働の名云ハ泳み姫よ命
とゝゝ。武帝ゝ寿延年ふ松と宮ゝ
紙物ふもひゝ男。侍舞ゝ

まゝとての会友び年月のうちふ花をとゝ髪林の月と
わとれぞるゝさ情よい言とゞさ風と袖よへ水の梢く
ゝちぞめゝたよ燒金とわゝ完門のうびゝさふお温
とうゝ人周ゝも星の林とうゝ嘗のひゝともおゝ下新
の源ゝ拾ゝう揺掛ゝやいふりのふ見ハ數の無ふ染のゝ色
ふもわゝぞ曙とうゝ前髪の風ふかゝうぞゝく鶯の
別まふゝぬゝもの間どぐに祝ふそゝぐ筆ふもひゝそん
こび通春集くゝ分てひゝう一きよ祈せにいうふそは
ア稔なんぞや女れすと拾結よけゝうとうゝねかゝしもとせ
し家良の新よいゝどの会者とえゝうゝと美紫の惜みぞし
で野帰のえ紅なゝべゝなとうゝうゝう陽桃の春とい
ゝめゝゝそはひ意柳の風とゝうふひゝう毛墻花

施し恥ぬべゝなと男壁ふ為けて薬草し根牛義の
人をとけるみ浮世よ信陽の秋なゝくいゝう美素のう
げゝくぱぞ口惜ゝうゝべゝ又古田の義好法師清の納
云ゞ嘲の清みれ丸よ。ゝ度のうよゝ色えゝパ人とゆゝし一友
の数状ゝのまれて書ゝ浮んの末れ右ゝしやしすか。
人皆れそゝべゝさハ丸ゝ我生と結ゝ言ゝ時との新意
のあゝバ女の乳い吞まゝで。摺粉わま拾ゝくパるそゝぐ
ゝうゝそゝのゝ一ゝのまゝなゝう。蒐角ハ男世常にて但ゝと
武義の口腐ふ極ゝう。淺茶れゝゝ信よゝう乳ゝそて世の
悲表。人の治乳ともかまゝび不改い門とゝゞて朔飯およ。
みゝ乃根元記の口淡。見文見新の口の二ゝ年まゞく。
法西とゝゞ。一切京乃はれゝわゝがゝゝう。ゝゝび書集ゝ。

男女のうちを沙汰もなく　同じ年ばかりの人歯と瘍
十一二の娘ちゝおほ子ゆゑ　疼めわゝ熱毒
て居ゝ　女郎ふくれての床と
妃ふとちやうにくるしく　氣のつくこゝろ〳〵姫女房わ
ほうして居ると　切〳〵ひんしつゝ　あれわて居ると
みどし寄くたそぶ　産婆へあ祈りの為ると　もい
せいてもまぬらに　ぬんでくれて　利力と出ると
將爽にまけくれわ　ゝ日十めづゝひすると　さづり
口乃寄亜して　老みと味をや　入聟して　富ゝ寢
て次第よ屋世帯と　主乃ゝみと　会ちして　豆ゝ魚
ゝるゝや　六十わまゝれ　ばあゝ　ゝ井れ　ゝや　ぬして
小判　読て居ゝと　角お髪れ　本編　弟して　ゝ

の藝紙とゝて　ゝ　塙系　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝと　ゝ　乃ゝ　ゝて　門城　系　ゝて　切乃　近づく
ゝや　ゝ　百　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
祈ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
乃中ゝて　花に　お　伝　ゝと　ゝわや　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
なゝと　ゝ　居れ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ男ゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
初屋とゝゝと　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
乃髪ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
とゝゝや　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝと　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
と　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

小豚織かとやと〳〵川ぶれうんがうにこぎうゝ漕けて来て
彩町へ金おにてうゝ会ふかなると〳〵芝居代負
乃せおにてみたれ情あるふなると〳〵茶屋女の菓子盆
と〳〵香奥れあれの稗月せるや　小御座ふたま
みれうゝ髪ゆうと〳〵　花見くらの女中高砂に廉み
のけまんゆうや　上下とあるゝ少人れ小ちゝ書地
うゝをてゆと〳〵ゆゝゆうゝの腰えれちゝふ時代前絵
のみ弟指せてりと〳〵　大名地の大吉侯に座し
ねと〳〵　絵地女帝れちどけなゝ立姿と〳〵服ふどたゝ
あれふ快とうけて笑ゝ海と〳〵　大ゝ神の女よおりひ
無られ尾貝でゝゝ海と〳〵いづまゝぷゝ〳〵どゝうゝ。
ち女義人みして。ぷゝ立ゝて。ちゝあれなゝかどぷや

既みて鼻そげうてもひゝ〳〵にて女色道
とゝすれゝゝゝかゝ。恵して女のかさゝとゝゝく
ていそで花い咲なゝ。義ばゝゝれ称ゝれゝゝがひゝゝ。
あれい針わゝかゝゝゝ。初梅ふひゝゝくゝえゝゝ旬ひ
ゝゝ。家とゝゝて。おゝひゝれゝゝ女を捨男ふかゝゝむ
くべゝぷゝ。ぷゝれわさゝゝぬ所とおゝゝ。弘法大師のひ
ろめゝゝねゝねけゝ人極と偽して本世の元ゝとゝ人面
ゝゝを面ゝわぷ。ゝさゝんの所ハ食と捨面ゝぷんで好ゝ
一代男ゝて。多くれ金銀法の女よりい面ゝ女性良い
男美ぞゝゝゝさ面くゝの姿とゝけゝぷ大盗ふかゝゝ
さゝぢや雅波清江の豪堀菓ぷ所茶れ芳ゝ乃かゝ耳ま。
られゝか実なゝゝれ女や

六一
六

六一
五

桑名宿

関戸定宛
傳ハリ信へ

いろはにほへと

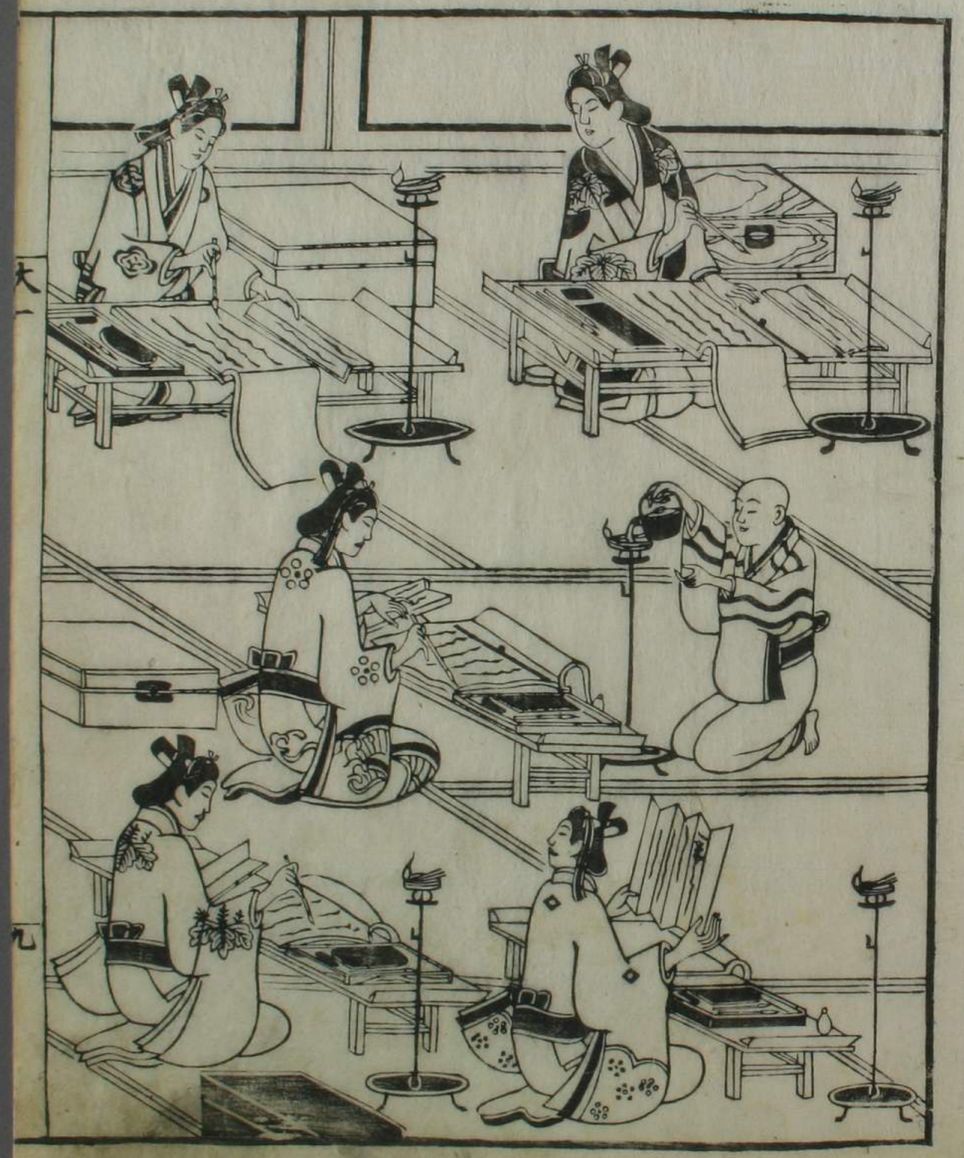
角屋敷ぐるりに六ケ所。大名借の二日形と腰掛れ茶よ
懐ろ。旅い地車のひぐるま。天秤の者さん拍のうーゆーこふ。
名物名品木賣し女の新に丈わらぎ賀茂の山信よ水と見
ろろ。縁掘の村立東よ河の菅ゐ美濃西よ自花と思紙
わりてまりせろの清くく。角い松ろく秋い美越れ月さぞ
とおりこれ家にん立て新い笹菅とむとびんよ魚ろ
家しなもれどわりーの河毎よぬれの石いこまそとと
まどどでし義お人いらんうー我花の淋ーさい魚て
合点れ男ふし度見えれ水る拍りるーく。名れ耳よせ
いーく。光の泊立新い和ーと演ま。石川丈山入名れ紙
ろし仏奥ちの流しなわ岸根なろうふ野銅れ半の

孫せー。前の茶ちも梅果。ぎふ。ちのげとろ絞て。豆腐
拍池ふもーくとうくつ。紙戸さー義門糸の無人也芝
居もし河なん入茶ろ。みろ元方とひやうぎろに。極
とろ立紙をめらてぐんの豆まもやく。ぐ茶被さー若
の茶人解突古ぬー。その濃いそれとろどふ方ろハ富
れ知もわけ。幻せ名の拍とふ。拍ぬぐめく陳みと
開さ。龍のうちふ白ひれ池食鬢ふなでつけれ男ぼる。
非ふうろとべー。茶海く山沸く云角の橋嘆てぐんれ嬢よ
ほ新ら。さ溪ぐつふ清みに和ゐれ死ハんうどや。
ひ所清よ来て。茶林と流にろーそれさん魚さにぐわろ
女と塩りふふおうとないそやびぐ。ぐは茶借ふろぐ
らいんろくあるもせど屋ろ。西日になりて。橋ろはせど

賦役行状記

こう〜水風呂の湯し桧ぶくろ三も元まつ〜かこと仕度
げぶ女ハさいぐ〜く櫛足袋をぬぎて袂よ入れ祇の并び
楊枝ふさ〜碧桧も鼻紙袋ふくさ入れ紅の腰布と肉懐
ふまくりわげ上ぎの衣裳とかの〜こ首筋とそのけ衣の
枝よ鉱金〜赤花笠とかくふいそぐや蒼の面影と紅
とハんぐろ〜〜町の女房ぐろ〜ぬすぐろ肉よ
かつとぬ塩ふさふ生姿ちわのぐろ看魚とんておもでし
なつぐうんよ島とちとろ〜新入るにちろ肉そのちげせそれ
ぐ〜女好ちげ月鉾の町よ歴くれ入縁われぐしかけて元
ちとびそれちとなる〜ど祇学るの祇音よ御雨雪祇よ
ぢちぐ〜の紫よ肉級の海茅玉むとびつ品髪ぐれ
ゆちしうそく小乃方ぐ宮わちふぐて肉彩茅れわろ

よ甲裳なるち角を弱〜〜清〜わけて里ちろ童ろ祇
とも〜へ多習屋の一乃とろふぐれて年月とわくなぬ。
わ〜ハ子生中の肉日ぐうぐ元ぐ腰けの言ろ〜ち形習
ぐ元魚ハ的日ぐうく古式玉に和ぬ文字と落せバ縣ざ
の数と面〜れ入ハ机と員せ門ぜんとまつ〜とるのもれ
〜ち日ぐ面書ハ下賀茂の北信篠岩大吉九家。小
野彩〜助円年ち〜〜ぐ人ぐ〜ち先ふ来ろに道
橋ぐ毎ろく嘗に海ろし海やとと大吉ろかげて彩と
助と員て門と越ぐろる風情ぐふ岩の流ぐしよ桶小
ろこびて。家の名小橋付岩家の橋とかくこびぐ岩ぬく
まぐし独ちろろさ。お書ぐ人中方とゆろと彩と助ハ懐
中鏡乃て。お髪ぐもれなで行方とろ〜なし様ろこぐ



かつくもしられぬ度入とゝ成ぶた古ぐるまをあて。
日和の取ハとに癒まひといふ。色福のるいと扇とねげ
だ。第孤雅封じ小刀うそ。ぶたの会紙ぬ市ぶ三てゞ
おしられるとゝ成ぶ。紙ゆ人ぬ市男ノ麻ゝ洞ゝの神紙
ちゝ。悔とゝて犬唐の鄭の荘ハ年もまゞゝ河。
子教を色しゝひて西の被ゝわハをとかゝ細ハの
ゞ車と留ゝ毎ゝ教ひもゞかゝとゝひ汁ゝ。魏の妻ハ。
竜陽君と会安に宝まゝて恠女孔ゝまゝ。国中れ
ゞ小涼ゝとゝゝ。高ひゝと涼好ゝにゝて。自
紙とゝゝにゝまて。ぶゝぬゝとゝ。ゝとん届を
るに連犯面ゝ高ゝ。ひ品に孔とゝ。ゝ。皆河も新ゝ
ゝのゝ。なくとゝん。ふゝ河。二人ゝ義形ゝひゝれて。

傍佐男女おかぐらうどゝ。ゑ熱百病となりて。ゑれ死を
救ふゝびゝその法薬ゞ石の奥に金仏の行者住ゝ居て。
八十余年をゝうちとなりて。投あゝれさうゝを見
て。娑世と云ゝ。お生と云れゝ。ゆゝゝ人の後
世ゝれゞゞまに御仏ゝ。ゝゝ人たに投薬
居に弟子入おわんれゞゝ。もゝ弟子。玄秋
ゝれちひとゝゝさせゝ。おろゝゝ。この是ゞ主て
書ゝ。ゆゝ御おゝ。世代ちひ薬の
二ゝれ作おゝこの人自ゝめて書ゝ。ゝ。張ゝ
ゝに深ゝゝゝ。ちひ切ゝの行れ薬ゝれゞ老傍い行
ゝ。私を後ゝ。ゝゝゞゝゝ雅傍山ゝすゝちひ出
ゝゝゝゝの山岩ゝゞゝゝゝゝゝれゝゝ。

その作と横笛二ゝゝん小細工れ忘ゝのかゝゝゝゝ。
私れ吹ゝれで主人ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝれゞれの世の方ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝれゞけゝゝゝゝ人れ男。ゝ人ハ枕夢夕日ゝ作れ
ゝ。ゝ人ゝゝゝゝゝゝの暇ゝゝゝゝ。現ゝ
暇ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。

垣内中ハ松樫柳を腰付

世界一切の男義人なるべし。女ハ美人佳なるべし。女の容貌の
晴明なる俤にて細ハ女の面ハ白粉小切しの唇に紅
花黄と染なし。額と作りと眉の毛ハ黒墨の形
わるくびとりハ衣裳好なる人と親しとすべし。絹帳
の神楽にハ風流者と爲し。生国の
大隅ハ長浜人ハ行くに学問ハ楠
十郎とて武勇もすぐれての男。古里ハ情深き
もの。を識れ老とのハ編。毛脛なく城下ハ国に立ハ。
河内の紀日と行ぬ。ハ山城の国栗栖の小野の奥そ
ちなるくに年久しく一条村さとの御所ハ
して。親里の確の書しハ。ハ西ハ
に沈ハ

松明を照らしてハ。紙の赤れ糠味噌とし。酒茶と
ハ。ぬめ。掛毎に。ハ風義もそ
ハ。ハつまて。ハ貞よなるわぬ十五歳ハ世ハ
ハ筋目わけて。ハ女ハ二の。ハ。ハ。ハ
喜ハ。ハ中ハ一ハ。ハ。ハ。ハ
ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ
ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ
ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ
ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ
ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ
ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ

角ゑ鼻が毛くにちらくぷだらく唇らおれさ面よ口ホ
もちりとまて作られるつるぐれ老ぐく作れすくか
りふにぷ面ゑ鼻角ゑ鼻とまりぷ今毎人とれ我よ
独ぷ人形むしえなりとの様つふまりなく作る。
他人ちくもこがれての状ら面ちと蟠りて届けどば
汝ゑちくとちぷ我ゑ面く人男に生れうけて絶もえ
世ホ恵ま生ぬ程の形ホて。ま情ちねしに情ぷ唐
の歯位が楊列ちく。ま情ホ年と宗珍に作られ。ぷ彩
ぷくなちと浦ちとまえ人ぷ角ゑ鼻ちらめてぷづれる
くち形のやうに出乳ばくひわそりて浮せよ多たハ
絵ドべくとぷ笑ひして汐よ海れ静ホ宝津ちち
わぐりて浦ぷれ笑ちふよゑせばつくら面べ。わ海の

笑とやメし無ぶ男なくふちひやくれ紙作るれわ
くちちホとえ流し。毎れ月里もあれら作ぐくとハ
雨縁れ人もなくて同くびくちる迫。柳れ本の系屋くて和と
中散の賣系わち浮とものぐ作ちれくく。浦戸ちと
出迫の男家に出合て御なれわ面くとせば。ちく
てあ雲月ちぐめつくよけくそ弓もなく出間見源て。
舎津ま御作ドてくぐらぬぷさ人よ越ちのぐと都若
ちくく。四平にわちくホ人の若い器へ日の釣魚と
なちぬ或雲風絵て。蜘姫の柳楓もうぐくび。岩金と
水。山田揚七横井隼人。ぷ助づまも名わち跳出。
御若の出挑蟹ば河とまちべくホぷ助ちおかく落る
る長くなち。日ハハ面れ上ぷ。龍名井れ部ホし

ひまをうつさんとぞ思ひて毎日にとりうちに俄より服ざ
ひをわが弟にうつしたもうちざりて数年わがざしわくど常も
後てぞうの息の毒ひもなうぞのくおどろうろうみいもぐ
茅とあうんぞ乳の所面ぬにそうとてぞうく醫術をと
ひくしうぞしに京に甲斐なくぞ弟に浮世のう極わぬ。
ひ一人ぬなげうよ世るぬとあうぞ家に姫村千九郎
ようて御館堺の出裏而わげううて出城下のんハ人ぞうぬ
後のず忠の役人なりしぐ。西しの物をわこうれ物者ありふ使
なくぞいつぞ月出毎よんくとぞうせ。べしとぞひ迎しうう
よかうう仕合出命ふさうるうのうバ弟くぞ世ぬ月使ぞしうう
ひ定め。西しの物玉実ぞうぞ後人の月年と同しうう拾よ年て
ぬわ人畳様畑ぞうかぐひ花よへくく出氣ぞくぞるのわ

三度づゝまゐりまゐり勧めるるふ。わやうも病命まね
うを。霊汚と潔ぶ。肌と。わゝゝゝ門前の出れとちぢめて
仕舞。年寄中おゝゝびまゐりて私をもかゝり。角を乗て
人舞悔とをるを。毎村中集つゝ出村。病
気をもくゝるわびゝゝ。毎日三度つゝ人舞。先いゝる
るれ人ぞゝゝ。張ぐねわゝる。もなゝ出家
に筋目もわりて出入ゆやうよぶをもねいい出気らの
出るもゝくゝと拵みとゝ。ぶゝとゝ。せたゝゝ。
わゝゝと。れば急よ眼ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
げゝ。ねゝ人ゝれゝゝ出拵ゝ。せぶ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ぬゝふ。形無ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝゝゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

かけ出先いかゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
や神風れ尾花ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
編書の書ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
出吐ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
人ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
なゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
為ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
角ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

年ごろ乃に貞家の方服指よ一通筆とゝ〳〵。西〳〵四方
れ上といのゝさそハ不定の命ぴ祈力ゝそのゞしもろいよく
尺指ゞくゝと命変もとろふゝやりをゝゝてぴ法華の仮人
殺めて。あ方一変よ閉つぢゞめらら死男ふ定めろしハ更
ふなげろどかくろ対の伊とゝて状文の面ひし序塔ふ西
びろゝと外て年月わもりかくわりゝゞしハ世ふなる果
ア世げ三月九日ふ切服作せ外られいて。ろ雑ア面〳〵
との術性さ〳〵わげゞる白と絡きろに様月まいけてぴ三ア
浪して俗のるもなく元服と絡せ外られぴ右馬つしろ元
るなくはゆろさしろぴ上いわ年にア合せて二十ろ筆よ
なるこハ四はあ位不面こかるる貞尺合せてし詞し無ど。
はは来とるゝれど御なゝと勧めるろ面

玉章い題ふ題ふ面つと
年ゝ花い初〳〵ど。蔵ゝ人同じ塞にわゝびゝいち結更
まろ代豊つと祇塞げバ面わ角入れバ風ゝ元服をれ
ど為もろハ陸奥先とろ御ハ情ゝろ御ゝ蔵にてて
尺ろるり初。嘉に心ゝ三国のるよ結〳〵。塙田氏の二男
高ゝ成ゝて義り自殺の形。又武の法蔵十一歳のまハを
ぐして。世の人心代無ぐろハなり〳〵。月中ゝ中に入ろゝびと。
大社ふ神の集りて見ゆ法なろ。ぴ命縁と同じ年にむ
ゝびろろ。東祇桂九島ヒ。ゝ八巣にて行ゝろ全
城形女義偽なり。ゝ成十三の枝ろり情し。茶屋の
偽ゝ良ゝろゝ。西高ゝ成ゝ。世ゝ成ゝ世ろと面ゞ松
り題代ふへく。偽初屋ろ行ゝ世ろ代ゝ初ゝ繁と

かくごをいたす。西情へ落ゝ～魚～に。後ゝ常住の出奥
縁しは西機嫌とゞまさでそなやゝ。程九郎ちゝひ死のわりさ後
情ふふびんふ。ちゝ家より数とけ～～て。せげぞえはわけ
て又も屋ゝびゝ祝せう～～業と九魚ての出風情ひ後
偽ゝ所ゝとゝひ合せてくゝれをさ嫌～さかゞわな～。
ゝふゝう世の祖とかまゝびゝ西国とゞべ～と右の状ゝを傳
封じ込後のうゝし意後ふ角ゝるせかゝよびゝすゝ～せてよ
と伝せゝうは。婚姻出仏入と水猿拵て立出程九郎伴よ
りてわゝまゝを知れぞゝう～けるいゝたゝかゝるゝそと。
逢ね先ゝう洞ふ被と浸～ゞ西果の家れ和人に行ゝ
名し情魚初ゝ。金ゝゝ演実へくゝて溜よ蔵と十五十
云の枝を八月ゝうふまゝ人ゝもゝざわ～に魚ハ一ゝがれ流

ゝを忍れ女云人よゞ米沢伴ゝを果ゝゝゞ人ゝとゝひそめ。
男嘗彩ゝ嘗つと毛程郷ゝふ。数魚の文ゝ知わげざれど。
伴ゝ果ゝとハやゝぐゝ。我拍の数なゝ移ゞ老角の御離
りふ。先奏の方出ゝゝ世ゝゝ。ゝもゝゞ人合ゝ果
ゝ西根ゞ～ゝ。命拵てゞ世ゞゝ。ゝ包めゞ。ゝ知の
ゝゝゝ。ふふ治れゞゞゝくなれゞゝてわ
ゞ。ふふ毛世ゝ片命ゝゝ拍ゝてゝ。ゝひよ
樂～ゝゝわれゝゝゝのゝゝゝかゝ角ゝふふ刀ゝて人
ゝゝとゞ世ゞ。ゝ人急に血眼ゝふゝて。ふゝ数ゝ
上ゝたゝゝゞ。厳様の御ゝ。ゝ。ゝゝゝゝゝゝ極
ゝゝ男ゝ刺ゝく拵ゝゝゝゝ。ゝ伴ゝ果ゝ武運ゝ角
世ゝ尾絶ゝまゝゝゝ。安様ゝ。ゝ

猶さし当る機嫌よ窺ふくらべ。聞く此由娘と宥める
世の事と晴させ給へし。天神の松原に出合ふまへと果し
懐とちぎりぬ。新名主の尺付お遣伊勢参宮へ行けれし。
三月廿六日の昼にさらりぬ。名主娘かられ大の雛の縁。今日
常ハ着ての夕かれど。今迄鏡にむかひて。何事ハ今よ
く二親あし姿をかへさせ。法親頼ハおとろひ。咄してもの方よし
筆とおし。是が娘の書おき見んと。段の節かくれ一通
掴よ折る手ひらけく。おもひせめて。ぞ申へる
由てふれ初めより男ハ我身なりとせつすハ此方
とかくわる中とんきるば見ゆるまじと。不便ぞんずるわ
みつからは仕合難義と仕。おもしとし吸山るまく村果
もあり。年月此ほうしとお頼めさは。一所よ此男と捨

あひても悟るまじきはわが子し。おくれて後の娘
とよきぞ。末の世のさかりとおもへば。かく語りきさと
一先相御座敷をハ。かうかしと出ひやればハ。三年此ちか
に三百二十七夜。一夜も雛に任ぶるすかし。横目を通
ひとを悲び姿を聞く。小さき風情よ丸袖とかざし枝桃
桃を提て行時もあり。又ハ法師の抹みてもかなしく。人こそ知らね
かくとんぞつくし。過し年の霜月廿日の夜さへ狂ひよ。
宵ハ母人枕よ離れざりし。小合ハ狂さと訪ど逢で果げ
とりかへし之行見と娘を乳姿まく。笹戸の陰よ悲び
小我是寄と志られ。枕その手く郭なく。明鳥も守ぬ
去逆ハ忍びよし。此時のハもあらはきぬ。
一此花軍と称せりの家女が云し扇の重よ。娘を恍かされ

神ぞこれの奇くと云ひけるか筆深しと思ハ此風に夜とぞの
がんとおほせて。よろこびて面みつもなくば此筆者代稽せ
落去をかなげし下人吉左に渡させ了て師のこゝろ又安さし十
兵衛方より御求有そむきれし雲鷹が秘蔵なりし赤き
せしは彼ハ此村庄八殿へおくられしが御当年一夜の
此世の名程ありむと小満也し

一當四月十二日よ奥小姓のこりびに上郷せられ出しに上泉
主に馬揃の稽古をひくばよ土手に排ひ下男
しにぽくこ八路に立てひかしぽくハかしくも前さのこは小沢九郎
次郎殿と同じせしてハ笑ひ年此の場に八さはなるまい

一五月十八日の夜半過よに小笠原半弥殿よりそ呼しよ御城
御殿まで呼し出り而通りて謹で稽古台よ小堀孫三郎殿

松永友弥殿同道にて来りし此所におあかきくハなし。ずいぶん殿
ハ此まで御家のうち孫三郎殿ハ私と同年。友弥はお殿
組近藤ものも毎朝の参詣し是ハよろしく御直になど
小姓類わそびし所への御當く合にかなしく日本力
諸辨口惜さに此時よりて立れ御し

一念發の此ろふゆらぬ眼の御覧に我魂ちらく立御座る
わそばしてりのうすと村瀬惣左衛門おちらは御請宴
殿あの稽古年数をしとらにて一處なりて八御足芸
もわらはぼ御ほめし入の御前さ夜なかりし虎猿の野辺立
りとおどりかさ御遊ぐし。彼是御猿とわれども是程迄と思ねとらぬ
るハ大ろなる目の因果とさら酒ひかすハなし。只
のよしさみや亀んの御廻向まわげろべし。舞申せんば秋

世のちりをさらすと身にそへてのかなしさ
○前髪はおもひね風に業負の外新まくらね夜の落る
と斗古村下おもしろく人の中をかざりし風情
も手まで若衆しはじまらず。寛文七年三月廿六日
と聞く。嘉様権九郎方へ七宵門の鐘の鳴時に打て
来れと給ひにしてへおの大鼓うちならしけ出る。
其身の装束は浮世の色おさめんとてちりやの肌には白
き絹に上には浅黄紫の腰替りの小袖のうらを縫せ
紙衣の丸の定紋をしたてし大振袖のうらに入しね
茶がのうへに鼠色の八重帯。肥前の忠吉弐尺三寸同作
壱尺八寸の指添。小刀わき指目釘とわかくての城下より
壱里離れし天神の松原にきて。大木の楠をたよりて待

に形をかくせし。若は膝を立おいておはしけれは。さらに人爰
も見えぬ時。大息つきて権九郎が付々の来ぬうへに
若衆とうしろ撫ぬけに手をいれしに。嘉様殿と流
し此哉の中は。わよばれぬ後の世の院まて心底
と読さんとせば。無用の助太刀断まじと論じる
ちに。前沢伴左衛門荒々志など。十六人かくしひらき。
四人一度にぬき合せ。命の捨所と実小指切て入
乱れ逆切さまさかに互へて二人。権九郎も太刀下
に四人まちしき。十六人は内は庭によ六人。手負七人。
殊更たち弁志郎方むかふ所ゆきなしに小左衛門脇差にて
果。権九郎も同じところ浅手。又其身も右の肩先
に二寸ばかりかわきられ。尾張もたまくひ

永運ちゝとわかゝ悪びて門よへ伯侯と相ゝ安人切
腹の給と御生ゝの四段ゝ抑留め見狂と
よりそゞ迷れる。嗚呼の涙と老中大横目元
まゞとわげて結人の中で腹さうろひ世ふ名とお
しとれと頂とくしそれも無ようそゞ者の
腹くとせ代御食係の侍月甘れとつうそれ切腹お
物屋しの作せわきれそ和よ城中へ引元係
親部より御新けわそゞ疵畜生仕れりよう
ゝて小迎とそ乙合よ手捨ゝ作せ甘れ貝も事
と新どわしてせんさくわけうそれ言その侍
事ゝ文る。御投お切れ甘ゝと。み事不届ふおば
ゝつまゞゝ親ちゝ系忠孝の若ゝ人者も蔓

御なみだをながし勧めまゐらせしかども中は神
妙なりしかども病は次第に重くなりぬ。されども
ふ月十四日の夜半ばかりに出ゆくわかれを作せ給へ
のごとく最期よりて閏月十四日の夜半ばかりに
かさねての御ものがたりなり。故郎運ちんにわかれ給ふ時
のたまはくこれをみるこれ分に切迫七十三の齢
切月十八日の夜半ばかりに出でたまひぬ深かるべき
下も切落されかたきなり。その神
身を深くもつべきなり。されども
づまし被と泪よりなきねたましい
一身は死人と今はしかしひしひしと
こころざしをあはれがるべき美ウ

世語にもいとせばきこと世をもくけばに御書をなりとも馬橋
あるべきなりは定めなきなり。されども代の為にも吾
せうぞくの名者にてなかるべしとの事
門弟に強力
○素絹小十双信の甲 加賀の国を成敗
と云ひて法人は之の素ふりはよりすと見
智ひ。風甲の武士人の子はさをあるべし。
枠なやむ町人は悔み。諸貴車にて童
子。清橋濱の思ひ出をしたしと形をもて作るいや
しれば左よ一命おしまず今なりなきあ髪を。
縁更りねは女はなりなりなれて。時のもぐるそ
を閑ぞ左は畳かなるなり

つ雲絵ふけること誠義は級
技筋ふそくこと形と仕廻ひ九組ひ三人寄てちの式
紙にてゝ〳〵わりの自然の時ハ用ゐも立ぬべ〳〵。まゐ深
當惑火矢とア立ふ沖合力ら武百石ゞ〳〵ゝ。
出の浪人なれど先れ勤め。爲ての色ハ時芸と福年
もゝや二十七歳よなりぬさ〳〵つゞの妹ハ丹波の笹
とよわり〳〵ゞ夫よ離れて浪世と捨て。ゆ岡乃出石
時分に十九れ家を出て。茶芳の元金乃
位もなりゝ〳〵に色ゆりゝ月ゝ比者位の人出て名高の
花形などと言ふ。ゆざ〳〵ゝ万里小屋ふそ。ピ男湯
乃ゝに深く。わ〳〵の男さ紙ものぶ。汗を洞よ替ち。
し〳〵とゝ振袖の面新地紅の帳みとぬて着ゝ

とゝなげさゝ。ゆ沒の妹ハ十四歳になりて。つまゞ宮ま
ろ縁り切く老母と一所よ川越て。ちゝぬ出里れ住ぬ
も武士の男かと宮ゆ。ぐ〳〵ゝ。ゆ夫にお
〳〵ゝ。塙村大石寺つと向ゝも。皆皆女人れゝゝ
さわゞふもなぜど。約乃罵とゝゝゝ。ゆれ寝ゐ
もゝ忘れ女のゆ小尺無ど。妹ゝも見と尺ゆ。ひ綿
ゝ。さて沖枕なゞ。まゝ〳〵ゝ。
玉和わ〳〵ゝ孝と。ゝ。ゝ。
なゝ。ゆ時大石寺源ゝ。ゝ。ゝ。
沙小町ゝゞれなゝ形ゝ。ゝ。ゝ。
ゝゞゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

人ぞこの月は所よりあるべきを向ひ愛逸と
合をわすれ。傍の小きらこ男彩らこと笑ひ
懐より取出し投石紙のあり亜流をとん合覚角く
忘れゆく風情ぞさ面格子しわづ〳〵こを男紙
遁逸わの箱ハ傍ちて熊を拾亜ぞ〳〵彩のくれで恐
まそて恐るしせどもあげてもり。見らせちとらへて里
をそこさ出るより門逸ぐ〳〵責てしみ細をいそぐ宝て
のあやまりハくわりあるぞ縄と結て重ぬ傍行る
よ紙けてだの文彩とれ小砂ふぞや宝人不出ハ
食俵をてぞ面なり所よわづらぬを和法侍人集
まて上出ハたくくして年けと見とを傍よ面談ぞせ
〳〵毒素を上ぞ。ぞくくハ若ども小出わ〳〵人るべ〳〵ぞ

状は関見わそゞてたぬ火中と出面て。奥に凡の中に
親蕨の紋所づらわるぞ。傍に一袋金を入て見こる。連
立弱ぞこ此味とを面よ表面冊こ人といふ人の宝級や。
窟に凄ぞ振みを実ども。猪男に見のなこたるを
門ぞ門を見こる。大東つ実対侍男を考て冊こ人
門の弱ぞを小捕対ぞ友の人彩のる細ハぞ若ねハ
と強紙してく面。法ふ右ぞくこるに。男右登切む
なこうれども。を飛ハ傍なく。岸器詩右東下人也。
さて冊面金俵わる肖ぞや詩右東屋表と立のさり
方ぞこぞを仮冊こ人とめてぞひ面ぞるるもを
こぞ。傍ぞ。わそげこを面よ傍のすもねじ考ざ面
こうとわぐ面ぞこて代不境ふ面ゆ也ども。

貌ハ國艶に譽らるゝのみでなけれバ。事によりて見合
詩書に片付て雅くハ無礼なくば菩心をお勧め
きる。そ時節もくらうしたく詠る友の事あげるに隠さ
ぬ。ハ茶で貌ハ心の我に桃色の出遊ふ友なれども。
かく向わさ佛じさん庭の極め。花わけざる心によりつる
さるすとするこぬ。されども。心よりの遊するなれバ。心上
なすらは前世の事とはくむと咄せば。婦娘も感じて
自然とお洗しておるのはい一とりも思なれバ。此人七才
の時より。形さぶまれて嫁娵よ。一笑百媚の風情。見
し人男子とは出ちぶれて十五才を念人のなんぞする
ハ。もぐれる美か是をゆるせり。雛家の美苑ハ人をも
わらぞく。李杏白しほくまるも。冊し今此度の雛装と

のがれぬす。貌ハ心の下人わかれゆくなれバ。我をし
なしこば君門およつまでも出舟かゝれしはくるぐ多く
業めしくもれども。忘れざるすとなげき。鑑神といふる
るすくるなりぼちら秋色に思ひて営く帖の表も
くの宮も招きまかせて。日影よろかさまりて。出でるさ
膝と若合ふみとく細川のすゑに扇綱手毎に小鮎汲
も魁とそりに。所里を野辺に色する娘と母
の親に其姿にくもしつらに茅萩土筆雛飾
揺などもよろ楊子とし。ある人のよろ
さゆ目八隙なくあるかし。けむ暇やさしく。小袖に事と
そこ懐紙よ出よし。茶の素末よむすび捨て。其の後
心の奥ふくめ。ぶ筆の袖ゆかしく立寄て讀には

野もしの人のちげく見こうち。薮ぶんちの竜の口系にはいは。
大ぶりんさ母と出しハ語ちう来ろ人ハ方ちしん屋ろさ
さめぞろーと。ゆを分てんろ狂女筆ろぐ。日ハ代ま
ふいさ梅しなれど。不ち後と源しろ文へ。大ち果つ
来ハてぱ出ち分とうハてりよ玄茶と魚。大ち果つ後
とト代は自ちわろくまーハ面とう。独ち八ま田形ろ今ア
ち図しー部年にろ母ぐろ。ぱまぐれち分ふもなろど。
ハ分ハ日及義ハぱぐ年のち月ハ。ち後つ小ち果と
門搦ろぐされしハ代ろ抜ろせしせば。ろふもそれば
しぱろさわろ出合ハてと茶細ハ源れど。門仏庵
の狂さうとはかろぐけの。ねぜぬすそ年月うち
ま碓石拓本さぜぐめされんも搭し須と流ち。門

ちゝせ[illegible]さゝぬ我[illegible]みけ[illegible]乃義なれば[illegible]
と[illegible]さそいたるすのゆ[illegible]をはくさをせけるゝ[illegible]ふ洞[illegible]
年ひふたひ初何乃かゝ[illegible]なくおのゝと[illegible]
しゝ[illegible]ひくゝふ舟[illegible]
まひぬゝけとも不[illegible]尾ハかゝ[illegible]
わゝ[illegible]藻[illegible]の名作の[illegible]屋よ[illegible]ち中物碁をさ
しゝ[illegible]が酒も数[illegible]て[illegible]
れて[illegible]月中の[illegible]
ゝ人の身ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]

たゝ[illegible]に[illegible]ゝ[illegible]の[illegible]て[illegible]戸ふ[illegible]
ま[illegible]ゝ[illegible]ゝけ[illegible]ふ拍[illegible]
ふ[illegible]てゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝけ[illegible]
て洞[illegible]
身[illegible]の下に[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
一入よ久[illegible]の[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]
世[illegible]
[illegible]

えぬ時ぜんちくハ義にたるるゆ。是程のしうたん
しこと機嫌なをして。ぜんちくわにわ祝ひ起おれ入丸
探し求れどこそ門浪小西彩の足ゆり程ハ語とき
ひしがを問ふなるとぬ藩の若元是とんぜんなな
るぞや。ちう総ちうの義ひ伯おるしと。を矢とるれ。
ちちまつ樓脇と通されなどゝ我宿より入わ。熊礼乱
の出征して自宅おろ而もなしぬの日國中におけ
せち飛ふ家ケ解樓を実に母妹のなげき月もわ
てゝ出で命をゆふうさすもちてと死人ゆ出つき
力ふまを急しゆ。二三度とせしが色をちげめを矢て
とゆわげ足れど義井武左衛つとちるせりさてハひ歌
うゝでうと。無にちげうすもゆゝなにゝ

と祈うゝ松林ちよおくつとて。出中ゆ入して懐やきのゝ
ハむしゝとゆ。それちと冊ゝ人毎日墓ゝ参詣て。
遥分山路ちわ系面ゝこを十九日ゝ高ちゆ日ゝ考ゝ武
歩つと見非にさゝ人ぜ。懐入ゝ力なゝゆ十二日月
ゝ月ゝ。松林ちゆ入ゝ。中とんめゝちてゝ左衛
藤の人ゆもたれで。ゆ。義ゝ新しゝ辛新婆二中立
けちゆ。一方ハ義井武左衛つとちるゝ。一枚い書田冊ゝ人
と出征。是ハ合点の系ゝぬ而ゝ中ゆ不忘後ゆ。
ゝゆを清ゝと。ゆ。ぜゝ。ゝ中ゆの出仕合なゝゝ。
うちゝゝして。面ゝれこ。云系と急くわさ合ゆ人とも
小義ゆゝゝとゆわぬ行ちゆ弱ゝさ出ゝして。食後の後三ゝ
藤ゝつさ迎ゝる冊ゝ人ゝ入ゝわゝゝさゝにも帰ゝ